

助の豊かさをもたらしているフィリピンの状況を対比的に論じている点が興味深い。フィリピン社会における共助は、とかく腐敗の温床とされる私的な紐帯にもとづく利益の分配としてのパトロンクライアント関係と表裏一体であり、従来はそのネガティブな側面が強調されてきた。しかし、地方自治体、教会、NGO などのリーダーが有するネットワークを構築する力、すなわち「リンキング力」への注目、公助に頼れない社会における共助の可能性を示唆している。また第4章は、紛争についての公的な記憶には回収され切らない小さな「物語」や、「苦難の経験がもつその人にとっての意味」を記録し、伝えていくのは、「内」と「外」の両方に働きかけられる位置にある「よその」にこそできることであると論じる (p.148)。さらに第3章では、カンボジアで活躍する日本人の地雷除去専門家の事例が、第5章では著者自身が「よその」でありながらも、インドネシアの震災復興における住居支援において果たした積極的役割が報告されている。

このように、本書では災害復興における「よその」の役割に関する様々な事例が提示されており、示唆に富む。しかしながらその一方で、「アジアの防災モデルの構想」という本書の目的のためには、「よその」の介入に関する個別の実践例のみでなく、むしろそのような介入を可能にしつつ、「よその」の活動の空間を広げていく構造的要因の解明こそが求められるのではなかろうか。たとえば第2章では、フィリピン・レイテ島の台風被災地の周辺地域の市長が災害支援に果たした役割が紹介されている。しかし、伝統的なパトロネージ・ポリティクスのかたちでは説明できない新たな政治的リーダーの輩出と活躍の意味を明らかにするためには、そのような個人の実践を拘束しつつも可能にする構造的要因の議論が不可欠となろう。確かに本文中には、「1991年の地方分権化以降に顕著な、首長の政治手腕の変化も影響している」(p.73)という指摘はある。しかし、分権化の中での国家の後退という統治構造の枠組みに個別のリーダーの存在をより明確に位置づける作業が必要と思われる。本章の議論はそのような構造的要因よりも、むしろ現地社会における「困ってい

る人を見捨てずに助けようとする心」(p.61)や、「相互扶助精神の強さ」(p.79)など、きわめて一般性の高い(ある程度どこにでも存在する)規範や道徳が強調されている。むしろ求められるのは、個別地域社会の固有の構造的文脈に根差した共助の比較研究ではなかろうか。また、第3章の日本人地雷除去専門家の活動、第5章の震災復興社会における住宅支援の専門家の活動にしても、ユニークな個人の活動を可能にしている構造的背景は見えてこない。特に企業のリスク対策を検討する第6章では、国家、自治体、市民社会、コミュニティなど、災害による社会の亀裂を修復する諸アクターとのいかなる関係性や配置のもとに、企業防災の活動が可能になるのかという点に関する分析は見られない。

このような若干の疑問点は残るものの、本書は、特に評者のような東南アジア地域研究に携わる者にとっては興味深いものである。共編者の山本博之氏は、巻末のまとめにて、自身の調査地であるマレーシア・サバ州では、「日常生活でも政治経済でも出自が何らかの決定に影響を与えることはほとんどなく、たとえ外来者であろうともその場にどう貢献するかによって判断し受け入れるという社会であった」(p.242)という。そしてサバを含むマレーシアでは、「さまざまなよその当事者として関わることで社会が発展してきた」(p.243)と述べる。このような社会の特徴は、サバ州やマレーシアのみでなく、海域島嶼部を中心とした東南アジア社会にもある程度敷衍することが可能であろう。このような地域的特性に立脚することで、地域研究による災害・防災研究のさらに豊かな成果が生まれるであろう。

(関 恒樹・広島大学大学院国際協力研究科)

鈴木佑記、『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん、2016、346p.

本書『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』は、著者の鈴木佑記氏(以下、「著者」と記)が2005年から2012年にかけてタイ南部スリン諸島を中心とするアンダマン海域

世界で断続的に実施した調査に基づき、現地に暮らす海民モーケンを扱った民族誌的な著作である。なお本書末の「初出一覧」によると、本書はもとも2012年に上智大学大学院外国語学研究科（現グローバル・スタディーズ研究科）地域研究専攻に提出した博士論文と、著者の複数の既発表論文をもとに大幅に加筆・修正したものとされる。

本書の「はじめに」でも記される通り、とくに著者は2004年のインド洋津波がモーケンの社会に及ぼした影響に主な焦点を当てている。より具体的に言えば本書は、津波災害を挟んだモーケン社会の長期的な変化に関する、同時代的な記録（と考察）という側面を有しており、その点で近年注目を集めている研究分野である「災害の人類学」（ないし「災害の地域研究」）の文脈においても興味深い著作となっている。

以下、本書の構成と内容の概略を簡単に紹介したい。まず序論の第1章は「災害の人類学」と題して、人類学や関連分野での「災害」をめぐる定義の考察からはじめる。そこでは自然災害においても人間社会・文化との相関が重要である点、また災害に関する当事者の視点からの研究という視点の重要性などを著者は確認していく。第2章ではいわゆる漂流民と呼ばれる集団に関する先行研究の系譜を批判的に再検討し、用語の問題についても再検討を行う。その結果、モーケンについては「漂流民」や「海人」「海洋民」などの誤解を招きやすいタームではなく、「海民」という表現を本書が採用していくことが確認される。

序論に続く本論は4部構成を成しており、それぞれ第1部「モーケンの概況」、第2部「津波被災前の生活世界」、第3部「津波をめぐる出来事」、第4部「国家との対峙」という表題が付いている。

このうち第1部はモーケンの暮らしているアンダマン海域の諸特徴、モーケンを含む民族集団などの概要が紹介されている。その中でもいわゆる大陸部東南アジアとされる地域における海域性という視点や、「海域世界」という分析枠組みに関しても、先行研究等を参照しながら述べられていく。モーケンや隣接集団に関しても西欧人やタイ人による先行研究を批判的に考察しながら著者自身の調査による知見も加味して、モーケンが隣接する、

ないし関係する諸集団といかなる関係にあるのか、その民族名称をめぐる問題等を含めて考察が行われる。

第2部では2004年インド洋津波が起こるより前のモーケンの社会文化のあり方を、文献資料や口述資料なども用いながら再構成していく。このうち1970年代までは、モーケンはまだ比較的自由にタイとビルマ間の国境を越えて海上を移動し、海産物採取を行っていたことが指摘される。ただし第2部の後半では、総じて1980年代以降は、タイ政府の進めるアンダマン海域の国立公園化（とそれに伴う観光化）の影響により、モーケン自身も定住化が進んでいく過程が詳しく記述されていく。

第3部は、本書全体の中心的な主題でもあるインド洋津波という出来事とモーケン社会の関係が詳細に検討される。とりわけ第8章で著者は、「〈災害〉の経験」と題して、インド洋津波とはそもそもモーケンにとっては何であったのかを、言わば当事者の視点から詳細に検討している。その概略を述べれば、実は発災当時において現地のモーケンでは必ずしも近代科学的な意味での「津波」や「災害」という概念を持ち合わせておらず、「津波を予知して避難した」と当時、メディアで報道されたエピソードも、当時の当事者にとっては「ラブーン（洪水神話における洪水）」をめぐる出来事として解釈されたことなどが指摘される。

第9章では津波前と後の変化のありようを、モーケンの家屋（ないし伝統的には住まいであった家船）に注目しながら考察する。第10章ではナマコ漁を事例として、津波災害後の漁の変化を詳しく述べている。そこでは特に国立公園の事務所側と、その監視の目をすり抜けてモーケンの漁師が「密漁」を試みる様子や、新たな技術導入などで対応していく様子なども詳しく描かれている。

第4部では、モーケンと国家との関係やその変化の様子が主題となる。第11章では、既にこれまでも何度か登場したアクターである国立公園の事務所とモーケンの緊張関係が大きなテーマとなっている。第12章ではタイの外部へのモーケンの移動などを通じて、彼らの外部世界との関係を述べる。概してタイとビルマ、インドなどの間の国境管理は、以前に比べて厳しさを増しつつある

様子が描かれている。とりわけ「モーケンが国境や国籍を意識しながら移動している、あるいは移動しないという事実」が現在のモーケンを取り巻く重要な点として確認される。第 13 章でも国籍や市民証の有無などを柱とする国家への包摂（や排除）が、現代を生きるモーケンにとって看過できない重要な要素となりつつあることが指摘される。結論の第 14 章では、著者はここまでの議論を踏まえ、津波後に大きく変容しつつあるモーケンを取り巻く社会状況に関して総括的な検討を行うと同時に、災害研究における研究者の立ち位置の問題についても考察を加えている。

以上が本書の各部ごとの大まかな概要である。このほかに本書には、必ずしも本論の各章に直接的には対応はしないものの、著者が一連の現地調査の過程などで感じた印象的な出来事などを扱った比較的短い 4 本のコラムが収められている。

ここからは、本書に関して評者が特に重要と思うポイントや本書の意義などを述べたい。評者の見るところ、本書の意義は、大きく分けて以下の二つの研究領域の文脈でそれぞれ指摘することができる。すなわち、一つ目は（とくに東南アジアの）海民ないし海域世界に関する研究の文脈、二つ目は災害人類学（ないし災害の地域研究）の文脈である。

このうち、まず前者から述べたい。海民（ないし海人、漂海民などを含む）研究に関しては、著者自身が先行研究のレビューでも述べているように、日本に限っても羽原又吉らをはじめとする系譜がある。東南アジアの海民に関する人類学的研究に目を向ければ、代表的なものに限っても海外では A. Nimmo や C. Sather、日本でも秋道智彌をはじめ青山和佳、小野林太郎、長津一史や評者などを含めた研究の蓄積を挙げることができる。

ただし、こうしたアジアの海民研究の系譜を見ても、アンダマン海域世界のモーケンを対象とする民族誌的研究は（例えばスルー海域世界のサマ人を扱った研究等に比べて）相対的に乏しく、とりわけインド洋津波の前後を含めた現代的状況におけるモーケン社会を正面から扱った研究は、海外まで含めてもまだまだ研究が遅れていた領域であり、その意味で本書はこの分野での貴重な貢

献である。

次に災害人類学（災害の地域研究）の文脈でも、本書は興味深い論点をいくつも提供しているように評者には思える。例を挙げれば、近年の人類学的な災害研究では、現地社会の持つ伝統や在来知による災害への予防や対応を称揚する視点が提唱されている。これ自体は評者も少なからず賛同する論点ではあるが、本書の第 3 部を読めば、例えばモーケンの〈津波〉への予知や対応（とメディアなどで紹介されたエピソード）は、実際の現地の語りや解釈とは少なからぬズレもあることが指摘されている。つまり安易に近代的な災害観を適応することへの落とし穴を本書は気づかせてくれる。また、人文系の防災研究で欠落しがちな、ソフト面だけではなくハード面の重要性（コラム 3）も、ともすると看過されがちな重要な論点であろう。

こうして本書は、海民研究、災害人類学の両方の文脈において、いずれも貴重な貢献を行った研究だと高く評価できるだろう。ただし、若干の気になる点がないわけではない。

まず最初に、些細な点ではあるが、本書のタイトルでの用語の選択にはやや違和感が残った。というのも、先に紹介したように、著者は序論でわざわざ、「漂海民」（ないし「海人」「海洋民」という用語は誤解を招きやすく不適切であると主張し、その上で、本書ではモーケンを「海民」という（より学問的に正確で適切な）概念で描くという議論を周到に展開している。にもかかわらず、本書の表題では、「海民」はサブタイトルの位置に留まり、メインタイトルでは〈漂海民〉が（ヤマカッコつきではあるとは言え）用いられている点は、本文中での議論との関係が少し分かりにくいようにも感じた。

また内容面では、先行研究への参照ないし批判を踏まえての自論の展開という点では、若干の不十分さが残るようにも感じた。例えば国家と海民の関係性、とりわけ現代の海民が、実は国境や国籍を非常に意識しながら（場合によっては国境を逆手に取って）移動や越境的実践を行ってきたという点は、拙著〔床呂 1999 等〕でも中心的な論点として問題提起をしたつもりであるが、序論で一

言程度触れ (p. 40) た後ではほとんど本格的な議論や考察の対象にはされていない。すなわち、海民に関する評者を含む先行研究で指摘された論点と、本書の扱うモーケンと国家の関係の事例との間にいかなる違いがあるのか (ないのか)、などの議論が必ずしも十分に展開されていないように感じるのは少し残念な点であった。

また海域世界という枠組みや視点をめぐる議論の箇所 (pp. 53-57) においても、スルー諸島を中心とするスルー海域世界 (ないし Warren の言う Sulu Zone) に関する議論 [Warren 1981; 床呂 1999 等] が、やはりほとんど参照されていないという点も、同様の欠落として指摘できるだろう。

しかしながら、こうした若干の気になる点は存在するものの、本書が東南アジアの海民研究はもとより、人文系の災害研究の文脈などにおいて極めて興味深い貴重な貢献であることには何ら疑問がない。著者による今後の研究のさらなる展開を大いに期待したい。

(床呂郁哉・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

参考文献

- 床呂郁哉. 1999. 『越境 —— スルー海域世界から』東京: 岩波書店.
- Warren, J. F. 1981. *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.

福浦一男. 『霊媒のいる街——北タイ, チェンマイの宗教復興』春風社, 2016, 285p.

2014年に京都大学文学研究科に提出された博士論文の加筆・修正版である本書は、北タイのチェンマイ県およびその周辺地域における2001年から2年間の長期フィールドワーク、およびそれ以降2015年までの間に21回も実施された短期フィールドワークに基づく労作である。この15年間に目覚ましい社会的・経済的変動を遂げたチェンマイ

において、毎日のようにどこかで実践されているという霊媒術について記述した民族誌である。

本書は全8章から構成される。序章「タイの宗教と社会変動」では、近代化・グローバル化と新たな宗教現象に関する人類学的議論が批判的に検討されたうえで、現代タイ社会における宗教現象、およびチェンマイの社会変動と霊媒術の興隆が概観され、本書の視座が示される。人類学では1990年代ごろから主にアフリカをフィールドとして、呪術や妖術の興隆とモダニティとの関係が盛んに論じられてきた。一方、こうした研究に対しては、現代世界で生起する様々な宗教現象を、近代化やグローバル化に伴う不平等や不確実性の拡大等に対するリアクションとして一律に論じているとの批判がある。著者はこうした議論をふまえ、チェンマイの霊媒術の記述と考察を通して、宗教現象をいわゆる「聖なるもの」として孤立的・個別的に論じる立場も、それらを一律にグローバル化の影響に還元する見方をも乗り越えることを目指す。その際、著者は「コミュニティの成員が重要とみなすやり方で既存の文化的慣習を変化させる人間の諸活動」としての「創造性」(creativity)に着目する。チェンマイの霊媒たちの創造性は、主に、「儀礼の独立と真正性を保証する、本有的な完遂力 (intrinsic power of accomplishment)」、 「伝統的な共同体のなかの諸環境の変化に適応し、パフォーマンスに伝統を刷新する、本有的な適応力 (intrinsic power of adaptation)」、 「新たな儀礼を創造する、本有的な創造力¹⁾ (intrinsic power of invention)」からなるという。

第1章「チェンマイ、精霊信仰、霊媒術」では、現代チェンマイの霊媒術がラーンナー王国時代以来の精霊信仰と深いつながりをもつことが示される。ラーンナーの歴代の王は、土地の守護霊信仰・生魂信仰・祖霊信仰に基盤を置く都市国家ムアンの守護霊供養祭祀を統括することにより、王権の正統性を構築してきた。ラーンナーのシャム

1) 本文 p. 41 では「想像力」と書かれているが、訳語の invention やその他の箇所の記述からすると「創造力」の誤りではないかと推察される。